

C-I 23例, C-II 12例, C-III 6例, C-IV 8例, C-V 9例であった. C-I, II, III を良性群, C-IV, V を悪性群とした. サーマグラフィにおける乳癌の診断は, accuracy rate 71%, sensitivity rate 80% で, false negative は3例あった. サーマグラフィ単独での確診率は良いとは言えないが, 他の補助診断法も駆使すれば, さらに乳癌の診断率が向上するものと思われた.

28. 肝静脈の上下大静脈流入部付近を含む多発性転移性肝癌に対する手術経験と術後経過

松木 久・鹿嶋 雄治 (日本歯科大学外科)
三輪 浩次・浅井 正典 (臨港病院 外科)
吉田 奎介・三科 武
内田 克之・榊原 清 (新潟大学第一外科)
伊賀 芳朗

消化器癌とりわけ大腸癌の肝転移に対し, 原発巣の切除に加えて転移巣に対しても, 積極的に外科的処置を加える試みがさかんに行われるようになってきている. しかしながら, 手術効果は肝転移の程度によって大きく異なり, 特に多発性肝転移でしかも一般に切除の面倒な部位に病巣部が及ぶ場合, 手術の適応やアプローチの方法などをめぐり考慮すべき問題点は多いものと思われる.

ここに最近私共が経験した44才男性の多発性続発性肝癌手術症例 (S 状結腸癌術後) について述べ, 特に ① リピオドールを用いた CT 画像の経時的診断, ② 肝右葉前下区域のほか下大静脈と右・中肝静脈で囲まれた部分にも存した転移巣の切除, ③ かかる外科的処置にもかかわらず, 再度肝転移をきたした事実などにつき報告し, 若干の文献的考察を試みた.

29. 陳旧性外傷性巨大肝内血腫の1治療例

遠藤 和彦・金原 英雄 (三条総合病院外科)
高桑 一喜 (新潟大学第一外科)

受傷後2年以上を経過し, 手術的ドレナージを必要とした炎症を伴う巨大肝内血腫の1例を経験したので報告する.

症例は40才女性, 昭和57年5月中旬, 自転車走行中に自家用車と接触, 1週間後失神発作にて発症. 近医にて貧血症として治療を受けていた, その後右季肋部から心窩部にかけての痙痛と40°Cの発熱を繰り返して, 昭和59年8月27日, 急性腹症として当科緊急入院. 上腹部超音波検査にて肝右葉2/3を占める囊腫様所見. 腹部

CT スキャン及びシンチグラムで同部位に一致した低吸収域として認められた. 当初, 超音波映像下経皮経肝ドレナージ法を試みたが, 適応なく, 昭和59年11月9日造袋術. 11月15日切開ドレナージ術施行. 術後経過良好にて昭和60年3月5日退院した.

本症例は受傷後2年という長期経過を呈し, 手術的ドレナージを必要とした症例である. 肝内血腫の診断と治療法について考察する.

30. 手技上工夫を要した, 肝内結石症の2手術例

齋藤 宏・菅原 正明 (水戸済生会総合病院外科)
松浦 恵子・大橋 昭
薛 光明

症例1は58才女性. 術前, 肝右葉内全胆管に無数の結石, 総胆管にも狭窄, 結石が認められた. 術中, 右肝管にも S₁ 狭窄あり. 線維化した5及び6亜区域を切除, 7及び8亜区域の結石は, 胆管合流拡大部を切開, ファイバーにて各分枝ごと全て除去した. 肝外胆道切除. 再建は総肝管基部と7, 8亜区域胆管合流部切開の2ヶ所で, ルー式に胆管空腸吻合を行った.

症例2は40才女性. 術前, 総胆管及び後区域枝に結石がみられたが, 胆嚢管は不明. 術中, 右肝管の第1分岐直下の後区域枝本幹に S₁ 狭窄と結石があり, S₁ 末梢に結合で拡張した胆嚢管で合流する稀なものであった. 結石はファイバーで除去. S₁ 解除のため, 前及び後区域本幹隔壁の切除, 縫合, 拡大と, 拡張せる胆嚢管前壁より三角弁を作製, これを S₁ 部に挿入縫合した. 又, 乳頭部狭窄に対し, 乳頭形成術を附加した.

2症例とも術後経過は良好である.

31. 最近4年間の肝内結石症手術例の検討

高野 征雄・丸山 明則 (秋田赤十字病院 外科)
山際 岩雄・川島 吉人
武田 信夫

肝内結石症は, 胆石症手術のうちで最も治療に難渋する疾患であるが, 昭和56年からの4年間に12例の肝内結石症手術例を経験したのでその手術成績を検討した.

4年間の胆石手術例は204例で, 肝内結石12, 胆管結石40, 胆嚢結石152で肝内結石症は5.9%. 年齢は29~74才. 肝内結石症を結石の部位, 胆管の狭窄程度で5型に分類したが, I, II, III型が原発性肝内結石症4例で, 肝切除術2, 肝管空腸吻合術1, 肝切開砕石術1.

Ⅳ、Ⅴ型が続発性8例で、胆摘の他胆管空腸吻合術、乳頭形成術が行われた。手術死亡例はなく全例社会復帰した。術中術後に全例内視鏡下碎石術が行われた。肝両葉に無数の結石を有した症例に、胆摘、総胆管切開の後、肝静脈の走行に注意して肝表面より結石を触知しながら後上行枝、内側下行枝、外側上行枝を切開し結石を除去する肝切開碎石術を施行した。症例によっては試みられるべき術式と考えている。

32. 超音波映像下に無水エタノール注入療法を行った原発性肝癌の1例

鈴木 修一郎・伊藤 博
桐山 誠一・中村 潔 (高山医科薬科大学)
笠木 徳三・櫛淵 統一 (第二外科)
阿部 要一・藤巻 雅夫

食道静脈瘤の術後 follow up 中、AFP の上昇をきっかけに肝癌と診断し、超音波映像下にアドリアマイシン・OK-432 を、その後、無水エタノールを腫瘍内に注入した。AFP は最高 796ng/ml より現在 84ng/ml まで下がり、又、超音波像も halo を有する hyperechoic lesion から isoechoic に近づき、腫瘍辺縁も不明瞭化した。

本治療法は容易でかつくり返し行なうことが出来、局所的にはこの効果を期待出来ると思われた。しかし、娘結節、門脈内腫瘍塞栓や被膜浸潤に対する効果、又、肝機能に及ぼす影響など問題点も多く、今後さらに検討が必要であると思われた。

33. 新設医大開院1年5ヶ月間の手術実績と問題点

吉井 新平・松川哲之助
神谷喜八郎・橋本 良一
秋元 滋夫・大島 哲 (山梨医大第二外科)
保坂 茂・上村 省治
上野 明

山梨医大第二外科では1983年10月12日開院以来17ヶ月間に191例に対し、249回の手術を行った。年齢は生後5日(TAPVR)から95才(ASO)に及び、地域は県内(今の所県中・南部)からの患者が多いが、長野・静岡・神奈川・東京都等、近県からの紹介患者も少なくない。

疾患は胸部心臓血管系疾患が主体をなしているが、頭頸部、乳腺、食道、消化器、ヘルニア、外傷等一般外科

領域を含め広範囲にわたっている。また入院患者の約20%が緊急入院であり、これらは自然気胸、胸部外傷および老人血管閉塞疾患であり、当県の老人比率の高さと従来これらの疾患に対する対応の遅れが目立った。

今回、当科で行った手術の概要を供覧するとともに、手術患者を通してみた山梨県における新設医大の意義について考察する。

34. 高カロリー輸液とビタミン

川合 千尋・松原 要一
丸山 明則・佐藤 信昭 (新潟大学)
真部 一彦・柳原 清 (第一外科)
牧野 春彦・武藤 輝一

現在経中心静脈高カロリー輸液法(IVH)は経口摂取が不能、不十分あるいは不適当な患者の栄養管理法として各科領域で施行され著しい効果が認められている。IVHではビタミンの投与も必須であるが従来すべてのビタミンが過不足なく含まれる製剤がなく、その投与が繁雑であった。

こうした現状で今回われわれは2種のIVH用総合ビタミン剤(NK-041, MVI-12)を使用する機会を得たので、その使用経験を報告する。

結果: IVH用総合ビタミン剤投与によりIVH施行中の血中ビタミン濃度はビタミンA, B12を除きほぼ正常範囲内に維持された。Aは低値であったが臨床的に欠乏症状はなく、B12は高値であったが過剰症状はなかった。また副作用はなく投与に起因すると思われる一般臨床検査成績の悪化もなかった。投与方法も簡便化され、細菌汚染、異物混入の機会も減少した。

35. 我々が経験した多臓器不全(MOF)症例の検討

清水 武昭・長谷川 滋 (信楽園病院外科)
大村 康夫・金子 一郎 (新潟大学第一)
吉田 奎介 (外科)

消化器外科に関連する疾患で、急性腎不全に至った症例を、最近7年間に56例経験した。胆道感染症によるものが39例うち32例が多臓器不全(MOF)に移行し、死亡は11例28%であった。消化管損傷・縫合不全によるものが15例ですべてMOFに移行した。腸結核によるMOF症例が2例あった。胆道感染症のうち、閉塞性胆管炎によるMOFは23例あったが、6臓器不全5例う